

善光寺の山門を抜け本堂の前に立つと、足の力が抜けて思わずしゃがみ込んでしまった。母娘の何の手助けにもならなかった事が辛かった。笠の緒を解く指先を、ほとぼしる涙が濡らした。

二人が返り討ちに遭った日、ミチは千曲川に沿った道を姨捨に向かっていた。朝から梅雨明けを思わせる強い日差しがジリジリとミチの体を焦がした。それでも、時折川を渡る風が汗ばんだ肌に心地よかった。

その上、目に映る景色は故郷田耕の粟野川に似て優しく、川面にはじける陽の光が、しきりにミチに語りかけた。父や母、それに弟の多門次と久し振りに話をしてるように思えた。

今夜は姨捨の山頂から田毎の月を眺め、発句を楽しみ、故郷を思い出しながら星を数えて夜を明かそう。そう考えてミチは、姨捨山のいただきへ急坂を登って行った。

一町ほど離れた畑で農夫が鍬を振るっているのが目の端に止まった。その農夫が、ふと手を止めてミチを見たようだった。

気配に気づいてミチが農夫を見返ると、農夫は大きく腰を折ってミチに辞儀をした。ミチも慌てて笠の縁をつまみ上げるようにして挨拶を返した。

麓から一刻半も掛かっただろうか、山頂に辿り着いて背後を振り返ると、向かいの山の稜線を越えて真っ黒な雲が湧き上がるのが見えた。

その黒雲はみるみる膨らんで、太陽を飲み込むとたちまち朝からの青空が墨色に変わり、ぽつりぽつりと大粒の雨を落とし始めた。

ミチは雨宿りの場所を探して周囲を見回したが、開けた山頂にそれらしい場所は何も見えない。

数本の木立の中でひと際大きな樟の木を目指して歩き始めた時には、雨は早くも滝のような激しさで笠を叩き、背を打ち、足元に跳ね返った。

雨は強い風と雷を呼んだ。目もくらむ光線と、青竹を一刀のもとに切り裂いたかと思わせるビシッという、鈍いが強い音の直後に、山全体を揺らし空気を切り裂いて雷鳴が轟いた。

ミチは思わず胸の前で手を組んで木の根元に伏せた。だが、はつと我に返ると、次の瞬間には一間先が見えない猛烈な雨の中に飛び出していた。

田耕で暮らす頃、大木の陰で雨宿りをしていた木挽きが、その大木を切り裂いた雷に打たれて死んだことがあったのを思い出したのだ。

雨の中に飛び出しはしたものの、何も見えない。笠を容赦なく叩く雨音は、まるで祭り太鼓のバチで打たれているように耳に響く。

足元をくるぶしの近くまで濁流が洗う。全く方角を失ってしまったが立ち止まっているわけにもいかず、進む道も判らないまま前方に目を凝らして歩きつづけた。

すると稲妻の光に浮かび上がって何やら黒い巨大な塊が見えた。近づいてみるとそれは、うずくまった象ほどの大きさの岩だった。ミチは僅かな窪みをみつけ、倒れ込むように身を投げ入れた。

雨は強い風に煽られて膝を抱えてしゃがむミチを、右から左から執拗にいたぶり続けた。

濡れ雑巾をまといているのと同じく濡れの体から、狂ったように吹き付ける風が急激に体温を奪い去った。精一杯力を込めてこらえてみても、寒さで奥歯はガチガチと鳴り、体は小刻みに震えつづけた。

山全体が地鳴りのような唸り声をあげている。閃光が走ると間髪を入れず、耳をつんざく炸裂音が、空気も、激しい雨音さえも引き千切ってしまう。

頭の真上で雷の狂乱が繰り広げられていた。

雷に焼き尽くされるか、という恐怖心が次第に薄らいできた。今のミチには自分の身を護る術は何も無かった。

それは諦めの感情ではなく覚悟のように見えた。この旅を思い立った時、たとえ路傍の塵と失せたとしてもそれで良いのではないか、そう心を決めたはずだった。

この世に起こる総ての事柄、自身を取り巻くあらゆる出来事と共に在ることしか出来ないのだから。

そう思い直してみると、次第に心に平穏が戻って来た。すると入れ替わるように悪寒が腹の底から湧き上がって来て、ミチの意識が少しずつ遠のいて行った。

寒くてたまらないのに眠気がする。眠気に堪えようとするが、地の底へ引きずり込まれる快感がある。

抱えた膝に顔をうずめたまま、激しい山の唸り声も、耳をつんざく雷の音も次第に遠くなって行くのが分かった。

やがてミチの耳には、何の音も聞こえなくなってしまう。